研究報告

福祉系大学生の進路としての障害者支援事業所のニーズ・意識研究
－ 北海道内の障害者支援事業所へのインタビュー調査から －

佐藤みゆき[1)]*、家村昭矩[2)]、長谷川武史[1)]、濱谷紀子[3)]、佐藤俊之[3)]

[1)]名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科、[2)]前名寄市立大学嘱託教授、[3)]名寄市嘱託職員

キーワード：福祉系大学、障害者支援事業所、社会福祉士、ソーシャルワーク実習

１．はじめに－研究の目的と背景

名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科（以下、「本学本学科」という）の学生の卒業後の進路としては、社会福祉専門職への就職が中心となっている。福祉施設の中で、北海道の障害者支援事業所を対象にした調査を実施し、福祉系大学から福祉実務への接続に関する様々な意見を聴取した。これらの意見を基礎資料として、大学としてのキャリア教育、就職支援のあり方について考察を行った。本研究は、平成24年度名寄市立大学道北地域研究所「課題研究」として行った「福祉系大学生の進路としての高齢者福祉施設のニーズ・意識研究－道北・道央の特養へのインタビュー調査から－」、平成25年度の「福祉系大学生の進路としての児童養護施設のニーズ・意識研究―北海道内の施設へのインタビュー調査から―」の続編である。

いわゆる「福祉現場」には高齢者、障害者、児童等多様な種別があるが、三年度目を迎える本研究は、障害者福祉領域を対象としている。本研究では、障害者支援事業所の中でも本学本学科の実習生が多数受け入れられ、卒業生の就職先となることの多い知的障害者の支援を中心に行っている事業所に焦点を当てて、必要とされる人材に関する調査を行った。

２．調査概要

(1)調査対象

本学本学科に関連する知的障害者支援事業所：北海道内で本学科生のソーシャルワーク現場実習先である施設、もしくは本学科卒業生が就職している施設の計7ヶ所。

(2)調査方法

2014年9月～11月、調査員が対象施設に出向き、後述のインタビュー項目に従って、約1時間～1時間半の半構造化面接を行った。分析には、大谷が開発した手法「SCAT（steps for coding and theorization）」の枠組みを使用してコード抽出を行った。

(3)インタビュー項目

調査にあたって、インタビュー項目を設定した。①対象事業所における四大新卒採用者の特徴　②対象事業所で求める人材像　③応募者に大学で学んできてほしいこと　④ソーシャルワーク現場実習について考えること　⑤対象事業所における「社会福祉士」資格の位置づけ　⑥人材を送り出す福祉系大学に望むことの6項目である。

(4)倫理的配慮

インタビュー調査にあたっては、名寄市立大学倫理委員会に申請し、承認を得て実施した。

*責任著者
住所　〒096-8641　北海道名寄市西4北8丁目1番地
E-mail：miyuki.s@nayoro.ac.jp

３．調査結果

(1)調査対象事業所と回答者の属性

表1　　調査対象事業所と回答者の属性　（調査時現在）

	A施設	B施設	C施設	D施設	E施設	F施設	G施設
所在地人口(千人)	347	0.7	5	29	21	48	59
提供サービスと 用定員(人)	施設入所(52) 生活介護(52) 短期入所	生活介護(25) 重度訪問介護 居宅介護 就労継続支援B型(15)	生活介護(20)就労継続支援B型(40)	施設入所(40) 生活介護(59) 就労継続支援(21)	施設入所(50)生活介護(50)短期入所	施設入所(60) 生活介護(60) 短期入所	施設入所(30) 生活介護(40)
SW現場実習の受入	無	有	有	有	有	有	有
回答者の職位	施設長	施設長	施設長	法人次長	法人部長 法人課長	法人次長	施設長

(2) 調査結果

1)対象事業所における四大新卒採用者の特徴

まず、調査対象事業所における四年制大学を出た新卒者の採用状況を尋ねたところ、「四大卒者は喉から手が出るほど欲しいが『高嶺の花』」(C)、「福祉系大学生が来ない」(F・G)との回答があり、人手不足が深刻な現状が明らかにされた。

【仕事内容が知られていない】

ガイダンス等をやってもなかなか人が来ない。ハローワークに求人を出しても反応がよくない・・それで各高校に求人を出して、近隣の学校を施設長と回ったんですよ・・福祉っていうと介護とか下のお世話というイメージをもっていると思うんですけど・・私たちの仕事は、それだけではなく利用者の方々の生活のお手伝いをする仕事なんですよと。・・利用者は金銭管理が難しい方が多いので、一緒に買い物に行ったりするのが私たちの仕事なんですよと。そうすると「あっそうなんですね」っていう人が多い・・啓蒙活動が足りないと思うんですよね(D)。

そのような中、採用された四年制大学の新卒者はどのように評価されているのか、特徴を尋ねた。

「短大生と比べて少し大人かな、という印象」(F)、「復命書などを見ても知識のアンテナの張り方、次に発展する力は持っている」(F)という意見もあったが「学歴はあまり関係はない」(E・G)という見解もあった。むしろ、「保育士、介護福祉士の資格を取れる学校卒に比べてスペシャルなスキルがないという印象。いい意味での違いを打ち出させていない」(E)という厳しい意見もあった。

2)対象事業所で求める人材像

特に大学に限り体得できる内容にとどまらず、広く応募者に備わっていてほしい素養、資質について多様な言葉で述べられた。

「挨拶・社会常識・協調性」「礼儀」「明るさ・体力」「精神面の健康」「熱意」「探究心・向上心」「チームワークが取れる」「人権意識」「社会問題への関心があること」「障害者と関わる経験」等である。

【冷静に対応できること】

そつなく、ある程度のことがこなせることが必要・・時間がかかってもかまわないけれど。支援員として冷静に対応できることが望ましい(A)。

一方、「素直さ、謙虚ささえある人なら、障害者福祉を知らない人でも育てたい」という意見もあった(B・F)。

【ここで育てていこうという気持ち】

過去にはあまりいろんなことを問わず、人をまとめていける職員がトップになっていくという感じだった。だから、ここの職員募集でも「福祉系」とは謳っていない・・法学部でも経済学部でも。最初に作った人たちがそうだったということ、良い仕事をしたということですね・・そこで、福祉について何も知らないで入ってきても、ここで育てていこうという気持ちもある(F)。

3)応募者に大学で学んできてほしいこと

「社会人としてのマナー」(G)「虐待に関する知識」(G)「福祉現場でのアルバイト経験」(G)等が挙がった。

【ソーシャルワークを噛み砕いて現場に降ろせること】

ソーシャルワークで現場に役立つ理論がたくさんあるんだけれども、大学の中だけにあって、現場に降りてきていない・・レベルの高いものかもしれないけれども、それをいかに噛み砕いて現場に降ろすかっていう努力をソーシャルワーク側は怠ってきた。だから補いあってできる限り近づいていく努力がこれからすごく必要なんじゃないかって思う(C)。

【先駆的な施設を見る】

4年も時間があるんだから、いろんな先駆的な施設を見たり、いろんな種別の施設が展開しているところだとか、地域を見ることを勧めているんですよね。これは、たぶん社会人になってからはできないことだと思うし(B)。

その他、「リーダーシップ論、メンタルヘルス等経営論の基礎を学んできてほしい」(A・C)という意見があった。

【経営も大切】

経営学もこれからは必要になってくると思います。現在は契約制度ですので、利用者のニーズに合った環境整備を推進して行かなくてはなりません。そのためには、計画的な財務体制が必要になります。今後、運営と経営とも重要になると思われます(A)。

【経営の基礎の知識が不可欠】

貴学の学生さんは、入職後、たぶん10年以内には管理者になる人材・・でも現場一本やりで来ると、援助技術についてはスペシャリストなんだけれども、経営理論はわからないまま管理者になってしまい、大変苦労をする・・職員の管理、リスクマネジメント、コンプライアンス、メンタルヘルス・・そこを学ぶ機会がないまますぐ対応を求められると、途方にくれますよね(C)。

また、卒業論文の意義について言及する回答もあった。

【卒論をびしっと書く】

卒論をびしっと書いてきた方がいいと思うんですね・・データを取って、分析加えてっていう、それがち

ゃんと理解できていれば、問題行動があったときにこういうことが起きるだろう、というところから入っていける(E)。

【卒業論文は四大卒の強み】

四大卒は、一回卒論を書いている、そこが大きく他と違う強みだと思うんですね。何かを探すときにきちんとした文献、どういう文献を調べればよいのかということ、怪しいものを引用してはいけないとか、どうすれば確かなものになるのかという練習、そういうところをしっかりしてきていただきたい(F)。

【学ぶことを楽しいと思えること】

外国に研修に出したりしているのだが、そうなったら少しは英語ができないと、と・・自分の思いが語れるように、感謝を伝えられるようにしてみよう、とか。そういうふうになれそうな人。外国なんて行っても大したことないよ、と閉ざしてしまうのではなくて、何かをもらってこようという、学ぶことを楽しいと思うようなものが大学時代に身についていたらいいんじゃないかと思いますね(F)。

4)ソーシャルワーク現場実習について考えること

ソーシャルワーク現場実習は、大学教育と現場との貴重な接点であり、学生にとっては進路選択の契機となりうる重要な位置を占めている。この現場実習について対象事業所ではどう認識し、どのような感想を持っているのか。また課題について、詳細に述べられた。

①実習の目的について

「基本的には現場のことを知ることである。利用者の視点、職員の視点で」(B)。「障害者の生活をわかってほしい。その上で関心をもって業界に入ってほしい」(F)。

【実習は、現場で起こっていることを学ぶ場】

相談支援の技術は後から身につく・・基本的にコミュニケーションが取れるか、人権意識をもって利用者と関われるかを体験する場であってほしい・・現場で何か起こっているのか、何が課題なのかを学べたほうがよいと思う(E)。

②受入事業所の意識とプログラムの課題

ソーシャルワーク現場実習を受け入れること、またプログラムについて、受け入れる側はどのように感じているか。

「職員のスキルアップにつながるので歓迎」(C)という声もあったが、「事業所の負担が大きい」(D・F)という感想があった。具体的には「評価項目が細かくて、網羅的な指導をするのが負担大」(F)、「個別支援計画の作成は困難」(F・G)であり、「現場の職員でもいきなり作るものではない」(E)。また、「外部との連携については、入所系の施設では機会の保証ができない」(G)という課題が挙げられた。

【外部との連携の目的を意識する】

ソーシャルワークということでは、いろんな機関との連携とか、その連携は何のためにするのかっていう、その利用者はいかに幸せに暮らせるかっていうのが中心になると思うんで。うちの最重度の自閉の人が、知的障害を持って、地域生活をするとなると、24時間サポートするということはどういうことなのかと学ぶのも一つかな、と(G)。

【利用者の環境への影響】

実際現場も今大変で、メンバー（利用者）同士の相性とか、実習生が来ることで環境も変わるので・・そこを受け止めてこその現場なんですけれども、なかなか難しい部分もある・・それで、大変申し訳ないのですが、座学とか、現場支援の班に分けて、週ごとにやらせてもらっているんですけど・・知的障害や発達障害の方々は環境に左右されやすいというところもあり、コミュニケーションを短期間で詰めていくのは難しい(B)。

③実習体制等運営一般への感想、意見

現行の制度では、ソーシャルワーク現場実習にCBT・OSCEといった「実習前評価システム」があるが、これに関する疑問の声があった。

【現場で学べること】

OSCEは、画一化されて、テストで受けている感じがして。受ける学生も事前にいろいろやると思うんですけど、それは現場で感じながら、考えながらやっても学べるような気がします(B)。

【「北海道のソーシャルワーク」?】

CBT・OSCEもいいんですけれども・・北海道だけでやっている特別なことだと道外からは見られているようですが、それでいいのかと思いますね・・それとレジデンシャル・ソーシャルワークとストレングスモデルばかり。一つのアプローチに片寄らないでほしい(C)。

その他、「1、2年生時に、1週間ほどの実習をしてから本実習に臨むようにしてはどうか」(B)、「病院や地域包括支援センターの相談援助とは違った『現場モデル』があってもよいのでは。レジデンシャル・ソーシャルワークのようにむりやり業務と結びつけるのではなく」(E)という意見もあった。

④ケアワークの位置づけ

障害者施設系の実習では、ソーシャルワーク(相談援助技術)の実習に行ったにも関わらず、実際には利用者と一緒に作業をすることに終始することが多いと実習生からも疑問の声が上がることがある。この点、受入事業所はどのように考えているのか。

まず、障害者施設でのソーシャルワークにおいて「ケアワークは絶対にはずせない」(B・C)ことが強調された。「入職者も最低3年間は障害者と関わり、その経験をもって仕事の幅を拡げてもらう」(B)、「入職希望者でも相談援助を望む新卒者が多いが、それは最初からは無理だと話す」(F・G)。

また、作業であっても、ソーシャルワークとの親和性は高いものであるという(B)。

【「ものづくり」を媒介とした支援】

「ものづくり」を媒介として支援をしているということです・・言語コミュニケーションを解さない人であっても、ものの仕上がりですとか、取り組み方とか、職員に対する考え方の伝え方だとか、いろいろなことを見てとれることを考えたときに、こういう取り組みや作業活動はただ、単純な作業活動ではなく、利用者の発達成長を、どの段階でもどの歳でも保障しているものだと考えられるんですよね・・そしてその延長線上に、彼らの活動をもっと広めたいとか、社会とつながりたいとか、創作芸術活動などは社会とつながるキーなんだって。障害者アートも、まさにソーシャルワークの中のソーシャルアクションだったりするんですよね(B)。

⑤最近の実習生について

【積極性、自ら発信する力が弱い】

非常に真面目だが、積極性や自ら発信する力は弱いように感じています・・職員に対して感じたこと、疑問に思ったことをあまりこちらに聞いてもらえない・・職員も忙しいからって気を遣ってくれているのかもしれないですけれど、言葉数が少ないというか、もっとずうずうしくてもいいんじゃないかと思うんですよね(D)。

【学生は何でもやっていい存在なのだが】

利用者さんって実習生にはすごく優しくて、職員じゃないから許してくれるっていうか。そういう人も多いけれどバシーンとシャットアウトする人もいて、そういう時に、あれっ、こういうはずじゃないなって自信持って入る子ってそれで折れちゃって。逆におっかなびっくりで入ってる人がうまくいくとか。一概には言えないんですけれど・・でも外交的っていうか、人といっぱいしゃべる人は、ここは無理でも、ここ次、ここで頑張ってみようとか結構動いていて・・学生さんは守られている存在だし、何でもやっていいというのが特権だと思っているのでやってごらん、とは言うんですけど(D)。

実習日誌についても、「まとめる力が弱い」(D)、「日記風で、目標に対してどう、といった書き方ができていない」(D)という指摘があった。

【素直に思いや背景を書くことが必要】

詰め込んだ単語だけで、ポンポン日誌を「言葉で押して」書く。起きていることを強引に専門用語や援助技術に結び付けているが、もっと素直に思いや背景を書くことが必要・・障害だったら一緒に生きる、共に生きると自分たちは本当にそう思っているが、一緒に暮らすだけの覚悟みたいなものがなければならないと思っていて、それを技術に置き換えると無理あるところもある(E)。

5)対象事業所における「社会福祉士」資格の位置づけ

まず、社会福祉士の有資格者の待遇であるが、「初任給で資格者とそうでない者とでは差がある」(B・G)。「資格手当がある」(B・D)。「入職してから資格を取った人には合格祝い金が出る」(A・E・F)。「受験手当として、受験を申告した人に図書券」(E)等の配慮がある。

職員が社会福祉士の有資格者であることの意義については、積極的に肯定する回答が多かった。「資格は不可欠。上位の職位を目指すためには必須」(A)。「2級ヘルパーより上位の資格者を優先的に採用する」(B)。「能力があるものとして人事考課で考慮する」(A)と述べられた。

【知識を他の職員のために活かせるか】

国家資格を持っているから将来的に上に行くかといえばそうでもなくて、それは入ってどれだけ頑張るかっていう点だと。ただ、それだけ知識を持って入ってくるわけですから、そこでいかにその知識を他の職員のために活かしているか、それができるかできないかだと思うんですよね(E)。

6)人材を送り出す福祉系大学に望むこと

上述の内容と重複する部分もあるが、以下のような要望・意見が挙がった。

「障害者にかかるボランティア活動をもっと行ってほしい。それにあたっては、その先に福祉の現場実践があることを学校として伝えてもらいたい」(B)。

「福祉の現場にもっと就職してほしい。そのために福祉の現場がどのようなものかを積極的に伝えてほしい。」(F)。

「メンタルトレーニングを大学で行えないか。虐待対応として、アンガーマネジメント等が不可欠となっている」(G)。

「貴学は地域の財産なので、聴講制度など社会人が学べる機会を提供してほしい。施設関係者だけの勉強会では行き詰るので、教員の方々にオブザーバー出席などしてもらって活性化させたい」(D)。

4．考察

今回の調査では、回答の背景に福祉業界の慢性的な人手不足があり、障害者福祉領域でも例外なく深刻な状況にあることが強く感じられた。回答者からは「資質云々よりも、まずは職員として来てほしい」という声が口々にあった。四年制大学を出た入職者について特段肯定的な評価がされていないが、意図的に四大生を採用したのではなく、応募者不足の中、入ってきた人への評価であることが一因と推察される。「応募者に大学で学んできてほしいこと」で、経営論の基礎を学ぶことや充実した卒業研究を書くこと等が挙げられているが、「できればこうあってほしい」という理想的な四大卒入職者の姿として語られているものと思われる。

ソーシャルワーク実習については、今回、詳細に意見を聴取した。実習の目的は「現場を知ること」であると考えられているが、実習受け入れは施設に多大な負担を強いている。過去の調査では、担当職員の本来業務との両立の困難性、関係書類の作成等の負担が述べられていたが、新たに知的障害者の環境変化があることが挙げられ、実習が受け入れ先の利用者支援にも見過ごせない影響を及ぼすことが示唆された。

「現場を知ること」という実習の目的からは、実習プログラムにケアワークを組み込むことは不可欠である。実習におけるケアワークの意義については過去の調査でも述べられていたが、今回は「ものづくり」を媒介した障害者支援のあり方にソーシャルワークとの親和性が見いだせるという趣旨の回答もあった。

このように少なからず負担を感じながらも、「現場を知って、その上で入職してほしい」との期待を持ちながら実習受け入れを、している施設に対して、現行の「ジェネラリスト養成」を主眼とするソーシャルワーク実習の受け入れをそのまま依頼し続けることの意義や実習のあり方については、今後、施設側の意見もよく聴きながら改めて検討する必要があろう。その際、回答にもあったような、施設系実習におけるジェネラリスト養成のためのプログラムを別途設計することも視野に入れるべきである。

社会福祉士の資格については概ね高く評価されており、取得者への待遇面での優遇や、職員の取得に向けてのバックアップもある。ただ、社会福祉士の資格が当該施設においてどのように活用されているのか、具体的な場面がイメージできればなお取得率は高まり、また大学での資格取得の指導上も有益である。

福祉系大学への要望は、現場を理解するための情報提供やボランティアの奨励を積極的に行うことで、入職につなげてほしいというものが多かった。障害者支援事業所への就職希望者が少ない原因の一つに、障害者の支援業務について一般に理解されていないことが挙げられたが、それは福祉系大学生であっても例外ではない。福祉現場に関する理解を深めるような教育やキャリア支援が、今、現場から福祉系大学に強く求められていると言えよう。

5．総括－三領域の調査を終えて

本調査をもって、筆者らによる三年度にわたる福祉事業所を対象とした調査は一区切りを迎える。高齢者、児童、障害者という福祉現場の代表的領域の事業所に行ってきた調査結果をここに総括する。

三領域の調査対象事業所に共通する認識であるが、まず、事業者が入職者に求める素養とは、各領域の利

用者の生活や支援の実際について理解した上で、積極的な関わりを持てることである。学生時代からその体験を持つことが望まれ、福祉系大学での教育、キャリア支援もそれに資するものであってほしいとの要望が寄せられた。現行のソーシャルワーク実習は、学生に現場を理解してもらい入職につなげる格好の機会であると考えられているが、その見地からは、現行の実習プログラム等のあり方については、過密なスケジュールや、介護体験等現場で不可欠な利用者との関わりの場面が後退している点で、強く疑問が呈された。

以上の現場の声を踏まえて、福祉系大学が教育、キャリア支援として今後行うべきことは何か。まず、福祉現場の実際を学生に伝えられるよう、現場との交流の機会を多く持つことである。具体的には、授業やキャリア支援の中で、福祉事業所で実際に支援に携わっている職員を招へいし、利用者の生活や福祉職場の魅力を語ってもらう機会を積極的に設けることである。また、教員が事業所を訪れ、本研究のような調査研究を行ったり、研修会の講師を務めたり、共に勉強会を行ったりすることで、教員自身の見聞を広め、よりリアリティのある授業設計を行っていくことである。

ソーシャルワーク現場実習のあり方については本学のみで決められる課題ではなく、折に触れて提言を行っていくこととなろうが、まず個別の実習から、現場の持つ課題意識をよく認識した上で受け入れ施設と意思の疎通を図り、折り合い点を見いだしていく努力をするべきであろう。ソーシャルワーク実習は、施設と実習生のみならず指導教員にも多大な負担をもたらすものであるが、多忙と煩雑さにまぎれて一つ一つの受け入れ施設と満足な対話がなされないままの実習になっていないか、今一度振り返る必要がある。

23日間という短い実習期間に盛りだくさんの課題を凝縮している点については、経営論の基礎やメンタルヘルス、介護体験といった現場で求められるメニューを大学４年間のカリキュラムの中で分散させることで、各々を手厚く学ばせることも考えられるであろう。

最後に、本研究にご協力いただいた各事業所の回答者の方々に、深く感謝申し上げて結びに代えたい。

文　献

大谷　尚(2007)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案－着手しやすく小規模にも適用可能な理論化の手引き－」,『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』54(2) 27-44

佐藤みゆき・家村昭矩・長谷川武史・濱谷紀子(2013)「福祉系大学生の進路としての高齢者福祉施設のニーズ・意識研究－道北・道央の特養へのインタビュー調査から－」,『名寄市立大学道北地域研究所年報』31　63 -72

佐藤みゆき・家村昭矩・長谷川武史・濱谷紀子(2014)「福祉系大学生の進路としての児童養護施設のニーズ・意識研究－北海道内の施設へのインタビュー調査から」『名寄市立大学道北地域研究所年報』32　-

社団法人日本社会福祉士会(2008)『社会福祉士実習指導者テキスト』